

学校教育目標

夢や志を抱き 自立して未来を生き抜ける
 ころ豊かな人づくり
 ～「学び」と「行動」と「心」、そして「つながり」～

総合的な学校関係者評価

評価をする中で、経年比較をすることは必要ではない。今年の取り組みに対して、どう工夫し、どこまで目標を達成できたかを求めるべきである。昨年できて今年できなかったからと言って評価を下げると言った単純なものではない。課題は毎年異なる。様々な課題に対応してこそ成果が見られる。その取り組み自体を評価することが大切。通り一辺倒な評価ではダメ。
 A～Dのカットポイントが曖昧。それぞれ、主観が出てしまう。客観性を持たせる工夫をお願いする。

自己評価 達成状況 (A：達成している<85以上> B：概ね達成している<70%以上> C：あまり達成していない<50%以上> D：達成していない<50%未満>)

評価の観点		達成状況	学校の取組状況・今後の改善について	自己評価の妥当性 (評価項目ごとの学校関係者評価・意見等)
学校運営	地域とともにある学校づくり	家庭や地域の人々への情報発信	B ・学校だよりや学年通信、学校HPを通して、情報発信できた。地域や保護者からも情報を待ち望んでいる旨の声をたくさん寄せていただいた。今後は、情報発信の手段をデータ配信にできないかを探っていくつもりである。 ・オープンスクールについては、コロナの関係でできなかった。しかし、地域の方の支えによりギター講習会や美術授業、歴史やマナーの学習など多くの外部講師授業ができた。秋に実施予定であった保護者教育講演会は来年度も土曜日開催で一人でも多くの方が参加しやすい日程にしていこうとしている。	・地域は学校のことが分かっていない。毎月出てくる学校だよりが唯一の情報源。大変だが、継続をお願いする。 ・オープンスクールはなかったはずだが、それでもBとなることありうるのか？達成状況の判定基準が分かりづらい。根拠となる事象があるはずであるため、全ての観点への記述が必要である。 ・危機管理体制の整備の項目にあるマニュアルの点検については、Cとされているが、コロナの関係でこれまでとは異なる対応があったことと推察する。その対応マニュアルを準備し、職員の共通認識の下で生徒の指導も含めて、新たな対応をしてきたはずである。そこを反映させないのはおかしい。達成状況の評価を見直してほしい。 ・コロナのためにできなかったことをマイナス評価をすることは間違っている。できなかったからこそ工夫してやってきたことがあるはずだ。そこに焦点を当てなければならない。何を基準として、何と比べてできたかできなかったかをもう一度整理をして考えるべきである。
		オープンスクール（学校公開）など住民参加の教育活動の推進	B	
	生徒指導	豊かな集団生活が営まれる学級づくり	B ・生徒会活動を活性化させ、生徒が主体となった活動ができ、生徒の手による組織運営が実施できた。また、誹謗中傷やいじめを撲滅するための行動も生徒たちで進めることができた。教師の指示で行動するのではなく、生徒たちが気づき、生徒たちで解決できるような集団に成長させていくことを目指していきたい。 ・毎週末の振り返りを中心に、日々の生活日記、学期一度の生活アンケートなどで生徒の内面に触れる機会を設け、担任や学年の職員で生徒理解を深めながら関わっていく。	
		児童生徒の内面理解を図る指導の工夫	B ・SNSのトラブルを事前に防ぐため、学期一度は指導できる場を設けていく。さらに、家庭の協力や理解を得るために、教育講演会を親子で座って共に学ぶというスタイルを試してみたい。	
		いじめ、不登校、問題行動、ネットトラブル等への適切な対応	B	
	危機管理体制の整備	マニュアルの点検・見直し	B ・コロナが感染拡大する中、学校独自の対応マニュアルを作成することができた。また、それを職員に周知させ、指導の徹底がはかれた。今年はこのコロナ対応を核に全ての対応を見直し、未然防止に努めることができた。	
		地域課題に応じた防災、防犯教育の実施	B ・コロナの関係で、防災や防犯訓練ができなかった。この点から職員評価が下がってしまった。実際に実施した後の反省からの見直しがないため点検ができなかった。しかし、できないからしないのではなく、できないからこそできることを探り充実させていく姿勢が必要だと考える。	
特別支援教育	インクルーシブ教育の推進、校内の指導体制、個に応じた指導	B ・どの学年にも特別な支援を要する生徒がいる。その一人一人に応じた適切な支援が必要である。今年度は、ケース会議を実施できたものの、その結果を受け、改善につなげるという点で大きな成果が見取れなかったことからB判定となった。本校の特別支援が当たり前であることから、さらなる新しい当たり前を見だし、全職員で取り組みたい。		
あさごドリムアップ事業	特色ある学校づくり	B ・県指定の「伝統文化継承事業」とからめて、体系的なプログラムを作成する段取りができた。今後は実効性のあるカリキュラムに仕上げ、来年には今後持続可能なプログラムへと取り組みを強化していく。		
教育課程	自ら学び自ら考える力の育成	B ・新学習指導要領の本格実施を見据えて、今年度は、定期的な職員研修会を持つことができ、ねらいとする主体的で対話的な学びについて共通理解が図れた。		
	基礎・基本の定着と個に応じた学習指導の充実	B ・授業が変わり、評価も変わる中で、新しいスタイルの授業へと工夫改善することが重要であると意識が高まった。今後、日々の授業を通してさらに指導に取り組みたい。 ・先行実施の道徳については、工夫改善がなされ研究授業も予定通り進めることができた。		
	道徳教育	A ・コロナの影響で、昨年までの取り組みができず、年間計画も刻々と変更しなくてはならなかった。その状況でも学校全体で意見を出し合い、臨機応変に対応しながら学校教育目標に掲げた力を生徒たちにつける取り組みが順調にできた。		
	総合的な学習の時間	B ・全体計画に基づく工夫改善		
課題教育	人権教育	人権尊重の精神の育成	B ・学校の教育活動全般にかかり、特色ある取り組みの全ての事業のベースになっている視点が、課題教育である。学級や学校での思いやりや仲間作りを潤滑に進める基礎が人権尊重の精神である。今年はコロナ差別が危惧されたが、うまく乗り切ることができた。	
	体験活動の充実	自然学校、トライやる・ウィーク等を含めた体験活動の充実	B ・体験活動については、自粛のため大幅に規模を縮小させたものができる範囲でできることにチャレンジできた。今後も、想定外の事態となったとしても対応できる校内体制が必要だと考える。	
	キャリア教育	進路選択能力の育成・社会的自立に必要な態度や能力の育成	A ・キャリア教育として本校で長年取り組んできた実績が、やっと今の時代に生きる取り組みとなった。先進的な取り組み校として、自負しながらさらに取り組みを充実させたい。そして、小規模校という利点を生かして、小規模校だからできることを推進し、生徒が将来社会で活躍できる力を定着させていきたい。	
その他	・行事の精選並びに業務改善の推進 ・明るい職場作り	B ・コロナのため、実際に実施できなかった行事もあるが、タイミングを同じくして、行事の削減に取り組むことができた。通知表の簡素化、家庭訪問の制限、マラソン大会の中止、ペーパーレス会議など具体的な推進はあるものの、勤務時間の縮小には至ることができなかった。さらなる研究が必要である。 ・職員の適材適所を見極めて、活躍できる場の設定であった。今後は、業務内容の比重に差の出ないよう工夫が必要だと感じている。	・働き方改革が叫ばれ、全国的に注目されている。できなかったでは済まされない。本気で対応を考えてほしい。 ・忙しいのは理解できる。しかし、努力は必要である。校内で無理なら、小中連携や近隣中学校との連携も一つの解決策になるのではないかと。	